

学会・研修会報告

第十七回

信州公衆衛生学会
総会と満蒙開拓
平和記念館

精神科部長 横山 伸

【地域の公衆衛生に携わる人々】

今年八月二十六日、飯田で開催された第十七回信州公衆衛生学会総会に参加してきました。リアルな対面での学会です。飯田合同庁舎の会議室は、暑い日でしたが頻りに窓を開け、よく換気をしていました。演者・聴衆にはマスクをしていない人が多かったですが、大会長の松岡先生は会長講演を始め数分で「どうも大きな声で話すものですから酸欠になってしまいそうで失礼します」とマスクを外して明るい大声で持ち時間の三十分間講演されたのに続き、特別講演の原先生は「僕も酸欠になりそうなので」と最初からマスクを外して、一時間を若干超えて熱弁をふるい続けました。保健師さんや保健所長さん等が多く参加する学会において、大会長の飯田保健所長や元飯田医師会長が良い模範を示して下さいました。

会の後半はコロナに関連した演

題が続きました。これが今回参加した一番の理由です。私は昨年来、過剰で誤ったコロナ対策を「コロナ対策禍」、有害無益なmRNAワクチンを何度も重ね打ちする・させる風潮を「ワクチン禍」と公言してはばからない者であり、患者さんに対しても医療関係者に対しても、院内でも県庁でも本社でも意見を語るようにしています。

対策禍やワクチン禍に関与せざるを得なかった保健師さんや保健所長さんたちが集まる場所、質疑応答や演題発表の形で彼らの行ってきたことを振り返って再考してもらおうべく話し合える機会は、絶好の機会でした。（一応私は十日程前からこの学会の会員です。）

発表からは…地域で住民も家族も医療や行政の支援職（もちろんほとんどがワクチン接種済みの感染）次々感染する中で対応に苦慮した方の体験的な事例報告がありました。そこで、次の感染に備えるとしたら何をすればよいですかと尋ねました。演者が「ワクチンを」と言いかけたところで、「この事例を通して、ワクチン是对策になると言えますか？」と重ねて尋ねたことから、このワクチンが無効であったことを演者も聴衆も認めざるを得ない場面になりました。フロアの方からも、将来新たに有効なワクチンが必要になる時が来る、ただし今回のワクチンは

確かに無効だったとのコメントをいただきました。

また、二類から五類に変わるに先立って感染状況の評価方法が変わり、最終的に連日報告から週一の定点観測まで変化したことを振り返り、どうだったか比較したところ結局なにも不都合はなかったという保健所からの報告に対しては、もつと前、例えば一年前から現在のやり方にしていてもよかつただろうかと質問したのに対して、演者は「その通りだと思います」と大きな声で答え、会場内の女性達（現場の保健師さんたちでしょう）の多くが力強く頷く場面もありました。保健師さんたちも、きつと随分前から、無駄な調査に労力を費やされたと感じていたのだと知りました。

一方で、厚労省発表の県別データに基づいて各都道府県の接種率と感染率等を比較すると、ワクチン接種している県の方が感染率等が低いという報告もありました。が、これに対しては、「海外からは接種するほど感染しやすくなる」と報告されている。なぜ国内外で違うのか」と質問しました。答えは得られませんでした。ちなみに、現在は厚労省も、ワクチンが症状を軽いものにするとは言いますが、感染予防効果もはや唱えてはおりません。ここで使われた厚労省データはいったいどのような

にして集められたものなのか、昨年五月までの期間のように誤った分類で集積したデータではないのか、元の厚労省データの信頼性を疑いました。

かく言う私は、県の公表しているデータに基づいて、ワクチン前の外出自粛（受診自粛を含む）の時期には県内の全死亡数が減少したのに、ワクチン開始後は死亡数が著しく増えたことを示し、「理由は何か？」と問いかける報告（というよりは保健師さんや保健所長さん達への質問）をしました。参考として、日本が世界に類を見ないほど多数回のワクチン接種をしているにもかかわらず感染数も多いいこと、なおかつ接種が増える時と亡くなる方の増える時が重なるようにみえることもお示しして、行政は全死亡者のコロナ感染歴とワクチン接種歴の両方をチェックする必要があるのではと提案しました。それははしかるべく手続きを踏んでご自分で調査して下さい」と言われましたが、さすがにこれは、感染症を主に扱うわけではない科の、本業の方で多忙な部長としては無理ですね。やはり行政が大学の仕事だと思っています。

【国が無謀な移民政策を押し進めた歴史】

今回の学会の前日、飯田市と同じ南信にある阿智村の満蒙開拓平

和記念館を久々に訪れました。あまりご存じない方のために簡単に説明しますと、昭和初期の日本が中国北部の「満州」とモンゴル（蒙古）の一部を支配していた頃、国中から大勢の農業従事者や子女を開拓団として派遣していた時代があったのです。終戦の直前、彼らは停戦協定を破棄したソビエト連邦（現在のウクライナやロシアを含む大国家）の軍に攻め込まれ、その結果多くの開拓民が殺され、またシベリア開拓に抑留（奴隷として拉致）されたのです。当時小児や幼児として大陸に残された人々が、後に「中国残留孤児」と言われたことは皆様ご存じかと思えます。帰還できた方々の証言に基づき、この悲劇の歴史を忘れぬようにと集めた資料が展示されているのがこの平和記念館です。

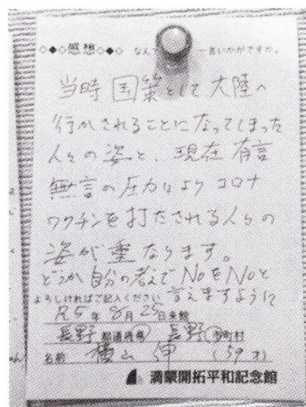
開拓団は国策として送り出されました。昭和初期の大恐慌から、当時山間農地で盛んだった養蚕が大打撃を受け（生糸の輸出価格が暴落）、農家の「口減らし」が必要だったことも背景にありました。しかしながら満蒙開拓は、それまでの歴史上の欧米各国の植民政策と同じく、現地の人々の土地を取り上げて行われたものでしたし、なおかつ開拓団は、ソビエト連邦との国境付近に、あたかも「人間の盾」として多く配置された、軍事防衛目的のものでした。また

日本国内では、お国のためということで、各自自治体やさらには各学校間で、送り出す開拓団員の人数を競うようにして人々を送り出していました。行こうか行くまいか迷っている農家の青少年らを、学校の先生や村の偉い方が説得して行かせていたのです。こうした開拓団の人数は、県別にみると長野県が日本一で、約三万八千人を送り出しています。ちなみに二位の山形県の約二倍の人数ですから、いかに長野県の人々がお上の方針を信じて真面目に従ったかということがわかります。そしてその結果、甚大な被害を出したのです。多くは現地であるいは大陸内を逃走中に死亡し（暴力的に殺され、あるいは集団自殺し、あるいは病死・餓死・凍死）、帰って来れた人々も国内に居場所が得られにくい（農地や住居がない）状況だったのです。

悲惨な運命に甘んじたのは、国策を信じ、また先生や偉い人の薦めを断れず、素直に従った人々でした。長野県は、養蚕が盛んだったという背景もありますが、実にこうした「素直な人々」が多かったのです。「国が間違ったことを言うはずがない」、ほとんど同じセリフを、令和の最近も体調を崩した高齢の方々から聞きます。ワクチン接種の結果として体調を崩していることが疑われるにもかか

わらず、接種を何度も重ねるのです。病院の「先生」も、開拓団を募った頃の学校の「先生」のように、接種を薦めるのです。国（さらには幾つかの学会）は小児や妊婦にも接種を薦めるのですが、「先生」たちも本心からそうしているのでしょうか。

長野県は接種率が高い方の県です。ああ、歴史は繰り返している、疑うことを知らないこの精神は何とかならないものかと、泣けてしまうことが多いです。写真のように感想を記し、翌日の（前述の）学会での論戦に向けて決意を新たにしたのでした。



額帯鏡

今年の5月より、新型コロナも5類感染症に移行し、本格的に外出する機会も増えてきた。10月の3連休には次男のアパートの掃除もかねて鎌倉に行ってきた。海外からの入国規制も無くなったことから、海外からの観光客も非常に多く、ようやく新型コロナ発生前に戻りつつあると実感した。マスクの着用も個人の判断ということ、地域性もあるのかもしれないが、逆に着用している人を探るのが困難なくらいの様子であった。長野ではまだまだマスクをしていない人の方が少数派なので外すのは憚られるところだが、逆にマスクを着用している自分に変なんじゃないかと思うくらいの感覚だった。11月に入り、日に日に寒くなり、ニュースではインフルエンザが増加傾向との報道がされている。コロナも含め、感染症には気を付けながら日々楽しんで冬を迎えたいと思う。

（伊東）